

とうげの茶屋

小川未明

青空文庫

とうげの、中^{なか}ほどに、一けん^{いちけん}の茶屋^{ちやや}がありました。町^{まち}の方^{ほう}からきて、あちらの村^{むら}へいくものや、またあちらの村^{むら}から、とうげを越^こして、町^{まち}の方^{ほう}へ出^でていくものは、この茶屋^{ちやや}で休^{やす}んだのであります。

ここには、ただひとり、おじいさんが住^すんでいました。男^{おとこ}ながら、きれいにそうじをして、よく客^{きやく}をもてなしました。お茶^{ちや}をいれ、お菓子^{かし}をだしたり、また酒^{さけ}を飲^のむものには、あり合^あわせのさかなに、酒^{さけ}のかんをして、だしました。おじいさんは、女^{によう}房^{ぼう}に死^しなれてから、もう長^{なが}いこと、こうしてひとりで、商^{しょう}売^{ばい}をしていきますが、みんなから、親^{した}しまれ、ゆききに、ここへ立^たち寄^よ

るものが、多おおかつたのであります。おじいさんは、いつも、ここにこして、だれ彼かれの差別さべつなく、客きやくをもてなしましたから、だれからも、

「おじいさん、おじいさん。」と、いわれていました。

おじいさんも、こうして、いそがしいときは、小ちいさなからだをくるくるさして、考かんえごとなど、するひまはありませんが、人ひとのこないときは、ただひとり、ぼんやりとして、店みせさきにすわっているのです。すると、いつとなしに、眠ねむ気けをもよおしていねむりをするのです。

もつとも、だんだん年としをとると、こうして、ひとりでじつとしているときは、目めをあけても、ふさいでも、おなじように、いつ

も夢ゆめを見てみているような、また、うつつでいるような、ちようど酒さけにでも酔よっているときのような、氣持きもちちになるのです。

おじいさんも、このごろ、こんなような日ひが近づきました。戸こ外がいは、秋あき日び和よりで、空くう氣きがすんでいて、はるかとのふもとを通とおる汽き車しゃの音おとが、よくきこえてきます。どこか、森もりで鳴なく、鳥とりの聲こゑが、手てにとるように、耳みみへとどきます。

おじいさんは、汽車きしゃの音おとがかすかになるまで、耳みみをすましていました。やがて、あちらの山やまの端はを、海かい岸がんの方ほうへまわるとみえて、一声せい汽笛きてきが、高たかく空そらへひびくと、車くるまが音おとがしだいにかすかに消きえていきます。

「もう、汽車きしゃの窓まどから、沖おきの白しろい浪なみが見みえろるだろう。」

おじいさんは、自分が、その車に乗っているような気でいました。

また、若い時分、山へ薪をとり、せがれをつれて行って、ちようど出はじめたきのこをたくさんとつたことを思い出しました。あのときの、冷たい地面に漂う朽ちかけた葉の、なつかしい香りが、いまも鼻先でするようです。帰ると、おばあさんも、まだ達者だったから、すぐなべへ入れて、火にかけました。

いま鳴く、鳥の声が、そのときのことを、しみじみと思い出させるのでした。

夢ともなく、うつつともなく、おじいさんが、じつとして愉しい空想にふけていると、朝、この前を通って町へ出た村の人

とびと
 々が、もう用をたしてもどるころともなるのでした。

この、のどかな、ゆつたりとした気持ちには、おじいさんと向き合^あう山も同じでありました。黄^き・紫^{むらさき}・紅^{あか}と、峰^{みね}や谷^{たに}が美しく彩^{いろど}られていました。そして、まんまんと、青^{あお}く澄^すみわたる空^{そら}の下^{した}で、静^{しず}かに考^{かんが}え込^こんでいるように見^みえました。こうして、いい天^{てん}氣^きのつづく後^{あと}には、冬^{ふゆ}を迎^{むか}えるすさまじいあらしがくるのを、あらかじめ知^しらぬのではないけれど、すぎし日^ひの、春^{はる}から夏^{なつ}へかけての、かがやかしかつた思^{おも}い出^でに、心^{こころ}を奪^{うば}われて、短^{みじ}い日^ひざしのうつるのを忘^{わす}れているのでした。まして、このとき、おじいさんと山^{やま}の静^{しず}かな心^{こころ}持^もちを破^{やぶ}るものは、なにひとつなかつたのです。

ところが、ある日^ひ、こんなうわさが、茶^{ちや}屋^やで休^{やす}んだ村^{むら}の人^{ひと}から、

おじいさんの耳へはいりました。

「おじいさん、ここへ、このあいだ、あめ屋さんが寄つて、たいそう酔つたというじゃないか。」

「ああ、いい気持ちで、帰らした。」と、おじいさんは、にこにこして、答えました。

「どうりで、きつねにばかされたつて。なんでも、一晩じゆう林の中で、明かされたということだ。」

「えつ、あめ屋さんがかい。」と、おじいさんは、びつくりしました。

「町へいく道へ出ようと思つて、おなじ道をなんべんも、ぐるぐるまわっているうちに、目がさめると、西山の林の中で、寝て

いたというこつた。」と、村むらの人はいいました。

そのとき、おじいさんは、あめ屋やが、いい機嫌きげんになつて、子供こどもの時分じぶんのことなどを話はなして、

「この西にしの方ほうの山やまへ、子供こどものころ、きのこをとりとりにきたことがあつた。」と、さもなつかしげに、あちらをながめて、あの山やまでなかつたか、いや、もうすこしこちらの山やまであつたとかいつていたのを思おもい出だしました。酔よつていたので、しぜんと足あしが、その方ほうへ向むいたのかもしれないと、そう、そのときときのようすを村むら人びとに話はなすと、

「なるほど、そんなことかもしれないぬ。多分たぶんそうだろうよ。いまどき、きつねにばかされるなんて、まったくばかげた、おかしな話はなし

だものな。」

その村人も、そういつて、笑いました。

しかし、このきつねの話は、よほど誠しやかに、伝えられたものとみえ、その翌日だったか、村の助役が、茶屋へ入つてくると、

「おじいさん、わるいきつねが出て、人を騒がすそうだが、ここでは、なにも変わったことはないかね。」と、問いました。

おじいさんは、にこにこしながら、

「あめ屋さんが、ばかされたといいますが。」

「村の女どもも、町からの歸りに、ぶらさげてきた塩ざけをとられたといっている。なんでも、後からついてきて、さらったもの

らしい。」

「それは、いつのことですか。」

「つい、二、三日にちまえ前のことで、まだうす暗ぐらくなつたばかりのころだそうだ。」

そうきくと、おじいさんの目めへ、二、三人にんの若い女わかおんなれんが、ペちやくちやとしやべりながら、この家いえの前まえを通とおつた、姿すがたが浮うかびました。その中なかの一人ひとりは、背せにさけをぶらさげていたが、からだをゆすつて笑わらうたびに、さけが、右みぎへ、左ひだりへ、ぶらぶらと、振ふり子このようにうごいて、途とちゆう中ちゆうで落おちなければいいかと、こちらから見みていて、思おもつたのを記き憶おくに呼よびもどしました。

「これから、寒さむくなつて、えさがなくなると、どんないたずら

するかしれない。」

助役じょやくは、こういつて、たばこに、火ひをつけました。

「どこか、道みちで落おとしたのでありませんか。」と、おじいさんは、いいました。

「なに、逃にげていくきつねのうしろ姿すがたを見たみというから、ほんとうのことだろう。」と、助役じょやくは、そう信しんじていました。

「おじいさん、きつねなんか、まあどうでもいいがね、それより、来らい年ねんはこの前まえをバスが通とおるといいうじやないか。」と、助役じょやくは、あらたまつて、さもおおげさに、いいました。

「バスがで、ございますか。」

「まだ、知しらないとみえるな。そうしたら、いままでのように、

歩くものがなくなるだろう。」

「歩くものが、なくなりましよな。そうすれば、もう、この商

売もどうなりますか。」

おじいさんは、力なくいいました。

「世の中が、便利になれば、一方に、いいこともあるし、一方に

は、わるいこともある。しかし、そこは頭の働かせようだ。考え

てみさっしやい。近い他の村から、みんなこの道へ出てくるだろ

う。バスの停留場が、この家の前にでも着くことに決まっ

たものなら、この店はいくら繁昌するかしれないぜ。」

「そうでございませうか。」と、おじいさんは、白髪頭をか

しげて、あたりしくいれた茶を助役の前へ出しました。助役

は茶わんちやわんをとり上げあながら、

「それも、運動うんどうするのはいまのうち、早いはやほうがいいぜ。」と
いいました。

「運動うんどうするといいますが、なにぶん、この年としよ寄りひとりでは
どこへも出でられません。」と、おじいさんは、かしこまってすわ
り、ひざの上うえで、しなびた手てをこすつていました。

「なに、おまえさんがその気きなら、代かわつて運動うんどうをしてやつて
もいい。」と、若い助役わかじやくは、相手あいての心こころ持もちを讀よみとろうと、
鋭すどく、おじいさんの顔かおを見みました。

おじいさんは、心こころで、どうせそれには金かねがいるんだらう。いつ
たい、いくらばかりあつたら、その望のぞみがかなえられるのかと、

もじもじやっていました。

「いま、話をはなしきいて、すぐといつても、分別ぶんべつもつくまいから、

おじいさん、よく考かんえておかつしやい。」

そう、いいのこすと、助役じょやくは店みせを出でていきました。

おじいさんは、このころから、なにか新あたらしい問題もんだいが、身みに起お

こると、しきりに心こころ細ほそさを感じかんじました。それは、年としのせいか

もしれません。そして、遠とおくはなれている一人ひとりの息子むすこのことを思おも

うのでした。いよいよ、いつしよになつて、頼たよろうかとも考かんえる

のであります。

おじいさんは、客きやくがいなくなつて、ひとりになると、このあい

だ、せがれがよこした、手紙てがみを出だして、見みていました。それには

そちらは、じき寒さむくなつて雪ゆきが降りますが、こちらは冬ふゆもあたたかです。父ちち上うえも、どうかこちらへいらして、親おや子こいつしよにお暮くらしく下さいませんか。私わたしどもも、まだ子こ供どものないうちに孝こうこ行うしたいと思おもいます、というようなことが書かいてありました。

たぶん、せがれが、工こう場じょうの休やすみ時じかんに書かいたものとみえ、工こう場じょうの用よう箋せんが使つかつてありました。おじいさんは、それらの文も字じににじむ、親おや思おもいの情じょうをうれしく、ありがたく感かんじ、手て紙がみを

いただくようにして、また仏ぶつ壇だんのひきだしへしまいました。長なが年ねん苦く楽らくを共ともにした女によう房ぼうが、また、せがれにはやさしかつた母ははが、いまは霊れいとなつて、ここにはいり、なにもかもじつと見みている気きがして、おじいさんは花はな生ないけの水みずをかえ、かねをたたいて、

つつましく手を合わせました。

このとき、人のきたけはいがしました。

「このごろは、めつきり、早く日が暮れるのう。」

そっくりながら入ったのは、年とつた百姓でありました。

「いま、町のもどりかの。」と、おじいさんは、親しげに迎えました。

百姓は、おじいさんのそばへ寄つて、腰を下ろしました。おじいさんのおし出す火鉢にあたって、昔風の太いきせるに火をつけました。

二人は、小学校時代からの友だちでありました。ほかにも仲のよかつたものもあつたが、早く死んだり、あるいは、この土

地ちにいなくなつたりして、この年としとなるまでつき合あいをし、たがいに身みの上うえ話ばなしを打うち明あけるのは、わずかこの二人ふたりぐらいのものであります。

「一本ほんつけるかの。」

「それを、たのしみに、町まちで飲のみたいのを我が慢まんしてきたわい。」

これを聞きくと、おじいさんは、炉ろの中なかに松葉まつばをたき、上うえから釣つるした鉄てつびんをわかしにかかりながら、

「来らい年ねんから、この道みちをバスが通とおるといふこつた。それで、いまのうち、はやく前まえへ停てい留りゅう場じょうの着つくよう運うん動どうをしると、さつき助じよやく役やくさんがいらしていわしたが、おまえも知しるとおり、おらも、だんだん年としをとるだし、いつせがれの許もとへいつたほうが

いいかとも考えてな。」と、しんみりとした調子で、語りました。

年とつた百姓は、下を向き、青い煙をただよわして、燃える火をじつと見て、きいていましたが、

「なにしろ、親ひとり、子ひとりだもの、いつしよに暮らすに越すことはない。だが、生まれたときから、住みなれた土地だもの、ここをはなれかねるおまえの心持ちはよくわかる。どつちでもよく思案して、好きなようにするがいいぜ。しかし、この道をバスが通るので、商売が成り立たぬという心配なら、しない方がいい。バスに乗る人はきまつている。毎日、荷を負つて、町へ出たり入ったりするものが、そんなものに乗れっこない。それ

に、雪ゆきが降ふれば、車くるまなど、通とおりたくても、通とおれつこない。ここは、冬ふゆのほうが、休やすむ人ひとが多おほいんだから、先さきこ越こし苦くろ勞ろうをさきつしやるな。停てい留りゅう場じょうなんか、どこへ着ついてもいいというき気で、成なり行ゆきひとりにまかしておかしゃい。また、どんなことがあろうと、おまえ一人ひとりぐらい、わしらが、困こまらしはしない。」といつて、おじいさんをなぐさめました。

「このくらいで、かんはどうだらう？」

おじいさんが徳とく利りをあげてつぐのを百しやう姓はうはうけ、口くちへ入いれて、首くびをかしげました。

「もうちつと、あつくするかい。」

「いや、ちやうどいい。ああ、おまえがいけるなら、いつしよに

やりたいたと、いつもおらあ、ざんねんに思うだよ。」

「なあに、そうして、気持ちよく飲んでもらえれば、わしも酔つたように、うれしくなるぜ。」

二人は、親しく話しながら、開いている障子の間から、ほんのりと明るく暮れていく山の方をながめていました。

その翌日は、にわか天気が変わりました。朝のうちから木枯らしが吹きつものり、日中も人通りが、絶えたのです。おじいさんは早くから戸を閉めてしまいました。

まだ、外の空は、幾分明るかったけれど、家の内は、灯をつけるのと、夜の更けたごとく、しんとしました。このときトン、トン、と戸をたたく音がしました。

おじいさんは、風の音かぜおとだろうと、はじめは氣きにとめなかつたが、つづいて、トン、トンと、音おとがきこえるので、だれかきたのだとさとりました。

ふと、きつねの出でるうわさが、頭あたまへ浮うかんだので、おじいさんは、いつそう用ようじん心しながら、戸との方ほうへ近ちかづきました。

「なんのご用ようかな。」と、内うちから大おおきな声こえでききました。

「お閉しめになつたのを、すみません。」

そう、いったのは、やさしい女おんなの声こえでした。おじいさんは、まます、不審ふしんに思おもい、戸とを細ほそめに開あけて、外そとをのぞきました。

すると、そこには、小ちいさな男おとこの子こをつれた、まだ若わかい女おんなのひとが立たつていました。ようすで、旅たびのものであるとわかります。

「もう、だれもこないと思ひまして、早くしめました。」

「すみません、お芋か、かきでも、なにかたべるものがありましたら。」と、女は、いいました。

「はい、ありますが。」と、おじいさんは、戸をからりとあけました。

「すこし入ってお休みなさっては。どちらへ、おいでなさるのですか。」と、おじいさんは、たずねました。

「この先の村へいくのですが、汽車がおくれて着きました、それにはじめての土地なもんで、聞き、聞き、まいりました。子供が、もう歩けないからというのを、なにかあつたら、買ってあげようといひ、いい、元気づけてきました。」

おじいさんは、奥おくから、かきと芋いもを盆ぼんにのせて持もつてきて女おんなに渡わたし、別べつにゆでたくりを一ひと握にぎり、それは、自分じぶんから子供こどもの両りょう手てへ入いれてやりながら、

「それは、それは、おたいぎのことです。ここから、もう一ひと息いきのお骨ほねおりですが、道みちはよろしゅうございます。それではすこしでもお早はやく、明あかるうちに、いらつしやいます。」といいました。そして、心こころでは、だれか、村むらの青年せいねんで、他郷たきやうに家いえを持もつたものの女にようぼう房ぼうであらうと思おもいました。

「お世話せわになりました。」と、女おんなは、礼れいをいって、子供こどもの手てを引ひき、風かぜの中なかをうす暗ぐらくなりかけた道みちへ消きえていきました。

しばらく、戸口とぐちに立たって、見送みおくっていたおじいさんは自分じぶんにも、

あちらでせがれの結婚けつこんした嫁よめのあることを思おもいました。

「いつ、ああして、訪ねたずてこないものでもない。」

もし、そのとき、町まちから、村むらへ、バスが通とおつていたら、どんな

になるか、便利べんりなことであろう。そう、考かんがえると、このときまで、

頭あたまなかの中なかにあった、商しょう売ばい上じょうのことや、一しん身んの損そん得とくなどとい

うことが一しゆんに落おち葉はのごとく吹ふき飛とんでしまつて、ただ世よ

の中なかの明あかるくなるのが、なにより喜よろこばしいことであるように感かんじ

られ、また、多おほくの人ひとたちがしあわせになるのを、真しんに心こころから望のぞ

まれたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「たましいは生きている」桜井書店

1948（昭和23）年6月

初出：「新児童文化 第2冊」

1947（昭和22）年9月

※表題は底本では、「とうげの茶屋《ちやや》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

とうげの茶屋

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>